

卦氣説の「氣」概念について

李 龍

はじめに

卦氣説は漢代易学の代表的な理論の一つである。清の李道平は「諸家説易凡例」において、卦氣を消息・爻辰・升降・納甲・納十二支など十一類の体例の首位に置き、「漢の世の大儒の易を言ふ者は、多く之を宗あがむ」とその漢における影響力について語る。また、卦氣理論の完成度について、鈴木由次郎氏は、「象数易の到達した最もすぐれた数理的宇宙観である」と他の理論よりも一段高く評価を与える。このように深遠な影響力を持ち、完成度が高い卦氣説は、漢代易学の研究においては避けられないテーマの一つであるが、卦氣説に対する理解が多岐にわたり、そのうちにさらに対立が見られる。

卦氣の「氣」概念をいかに理解するかは、卦氣説の定義だけでなく、その形成、卦氣理論の範疇などもつながる。もちろん、卦氣理論の枠組みを提示するとどまる限りにおいては、氣の定義は必ずしも必須とは言えない。また、個々の卦氣理論のみに着目する場合には、氣に対して異なる解釈が可能となる。これらはいずれも、卦氣説研究において「氣」概念が必ずしも共通の前提として整理されてこなかったことを示している。しかしながら、十数種類におよぶ卦氣理論を対象に体系的な考察をしようとする場合、あらゆる理論を考慮に入れた整合的な定義付けを行わなければならない。

本稿は、漢代易学における卦氣説研究の基礎的整理として、卦氣の気に関する先行研究のうち、とりわけ「氣」の定義が明示されているものを対象に、その定義が「陰陽（五行）の氣」か、暦日という時間概念に属するかという観点から分類する³。具体的には、対象となる先行研究を、第一に卦氣の氣を「陰陽の氣」と解する説、第二に暦日、すなわち「二十四氣」「季節・氣候」「時（四時・節氣）」のいずれかとする説、第三に「陰陽五行の氣」と暦日をあわせて解する説という三つの類型に分け、それぞれが依拠した資料を再検討する。そのうえで、卦氣説の「氣」概念を定義する際になお検討すべき点を提示し、より卦氣の体系に整合的な「氣」概念の提示を試みることを目的とする。

一 陰陽の氣

「卦氣」を解釈するにあたって、鈴木由次郎氏は、「卦氣とは『易緯稽覽図』の鄭注に、「卦氣、陽氣なり」とあるが、卦爻は陰陽の象徴されたものと思惟され、卦爻の変化は陰陽の消長変化を意味する」と述べる。^①氏の引用箇所^①に下線を付し、その関連する文脈を合わせて示すと、

① 甲子に卦氣 中孚より起る。

〔注〕② 卦氣、陽氣なり。中孚、卦名なり。中なる者は、和なり。孚なる者は、信なり。經に言ふ、中孚、豚・魚（言）〔吉〕なり、庶人養ふなり、と。庶人を擧げて之を言ふは、其の養ふ所微なればなり。微③ 陽 坎より生じ、④ 雷聲を為し、尚ほ未だ人に聞こえず、⑤ 律曆に俞々^{おこ}作るを助くるを知るを言ふなり。天子出でて耕すれば、諸侯當に耕すべきを言ふが若きなり、故に以て之を言ふ。

……陰^{かへ} 還れば雨なり、陰の威（色）〔なり〕。

〔注〕暴陰を還らしむ。⑥ 陽 坎より生じ、⑦ 氣 尚ほ微にして、寒温 未だ知れず、萬物 形を變じ、律^{はか}るに氣 先づ中孚を得て、卦氣 乃ち信愛して之を養ひ、故に卦氣 中孚より起るを言ふなり。^①

となる。原文は、① 甲子という曆日の起点において卦氣が始動し、これを中孚の卦によって象ると述べる

にとどまる。それに対し、②注は「卦氣」を陽の氣としたうえで、「中」と「孚」の義をそれぞれ「和」と「信」と解釈し、さらに中孚の卦辞によりつつ、庶民に養われる豚・魚を用いて陽氣の微を語る。しかし、なぜ卦氣が中孚の卦において始動するとされるかは、なお説明が十分とはいえない。

④「而為雷聲（雷聲を為す）」以下の記述は、③⑥「陽生於坎（陽坎より生ず）」の四文字が一致するための錯簡である可能性が高い。実際、張惠言『易緯略義』が引く『易緯稽覽図』では、「甲子卦氣始中孚（甲子に卦氣 中孚より起る）」の注として、④「而為雷聲（雷聲を為す）」以下は⑦「氣尚微（氣尚ほ微にす）」以下の文に置き換えられている。⁶ 文を綴り直してもなお解釈に困難を残す箇所はあるものの、大意としては、陽が坎より生じたばかりで、寒温の別もまだ定かでない微弱な段階にありつつも、律曆の推算によって、この時期に配当される卦が中孚であり、陽の氣が中孚において涵養される、となろう。④「雷聲を為す」以下は内容上中孚の卦と直接結びつかないものの、⑤「律曆に俞々作るを助く」という記述からすれば、卦と氣候との配当が律曆の計算に基づいて行われたことを示唆するものと考えられる。⁷

上記の注について、鈴木氏は、卦爻が象徴するのは陽の氣のみに限らず、陰の氣をも含み、卦爻の変化が陰陽の消長と対応する点と補足する。この補足は、『易緯稽覽図』の記述と整合的に読める。「卦氣、陽氣なり」という一句は、陽の氣の始動に着目したものであり、卦氣を陽の氣のみに限定し、陰の氣を排除する趣旨ではない。実際、『易緯稽覽図』の後文においては、「陽を降して風を為し、陰を降して雨を為す。昇氣上り、降氣微かなり。是の故に陽還れば、其の風必ず暴し。陰還れば、其の雨亦た暴し。

陽を降すの風、動けども條を鳴らさず。陰を降すの雨、潤せども塊を破れず⁽⁸⁾とあり、陰陽・昇降・風雨といった対概念を用いた論述が示されている。鈴木氏に続き、濱久雄氏も、表現の細部には差異があるものの、同じ注に依拠し、「八卦の爻は陰陽を表し、八卦の爻の変化は陰陽の消長を意味する」との見解を示す⁽⁹⁾。このように、「卦氣、陽氣なり」という『易緯稽覽図』の注は、卦氣の氣を陰陽の氣と解するため重要な文献的根拠として位置づけられる。

漢易を専門とする日本のもう一人の大家、小沢文四郎氏はほぼ同様の見解を示すが、氏が依拠したのは『新唐書』曆志に引かれる唐の僧・一行の「卦議」という別の文献である。「卦議」の冒頭には、

十二月卦 孟氏章句より出づ。其れ易を説くに氣に本⁽¹⁰⁾き、而る後に人事を以て之を明らかにす。

とあり、卦氣理論の一種とされる十二月卦を前漢の孟喜に遡り、占候の仕組みについて、「氣」に基づいて吉凶を占うと大略を述べている。この「氣」について、小沢氏は「蓋し陰陽の氣、即ち天地・四時・日月・五行の變化生成である⁽¹¹⁾」と解説する。一方、惠棟『易漢学』は「卦議」の上記の文について、

易乾鑿度に曰く、①太易なる者は、未だ氣を見ざるなり。②太初なる者は、氣の始めなり、と。康成注して云ふ、③太易の始め、漠然として氣の見る可き者無し。④太初の氣、寒温始めて生ずるなり、

と。乾鑿度に又云ふ、⑤易變じて一と為る、と。注して云ふ、⑥一北方を主り、氣漸く生ずるの始めなり。此れ則ち太初の氣の生ずる所なり、と。¹²⁾

と『易緯乾鑿度』巻下の原文及び注を引く。『乾鑿度』は、氣の顕現しない太易、氣の始まりとしての太初、形の始まりとしての太始、質の始めとしての太素との四つの状態を通じて、氣↓形↓質という物の生成過程を描き出した。惠棟はそのうち、①太易から②太初に至る段階、すなわち氣が生成される局面に注目し、「卦議」における『孟氏章句』の「氣」を「太初の氣」として理解しようとすると考えられる。

『乾鑿度』はまた氣の生成を易↓一↓七↓九の三つの段階に区分して説明するが、惠棟はとりわけ⑤易より一への転化に着目し、その注を通じて、⑥北方を太初の氣が生じる方位として提示する。北方は漢代の自然観・宇宙観において四時の冬に配当されるため、太初の氣が冬に生じ、④寒温もまたここから定まるとしていくとする氣の生成理論は、前述した『易緯稽覽図』の「甲子に卦氣中孚より起る」という説およびその注とも整合的に理解できる。

また、内容的により完備する経訓堂叢書本『易漢学』を見ると、上掲の引用箇所続き、

孟喜の弟子趙賓易の「箕子の明夷^{やぶ}」を説くに、陰陽の氣無くして、箕子當に芟滋に作るべしと謂ふ。¹³⁾

という一節が引かれている。自ら孟喜の弟子と称し、孟喜にも一時的に受けられた趙賓は、明夷の六五の爻辞について、陰陽の氣が弱く、草木の芽生えすら現われていない状態として解釈する。『易漢学』は惠棟の比較的早期の著作であり、その後、度重なる校訂を経ていることが知られる。初期段階の引用では「太初の氣」が中心的に論じられるのに対し、のちの版本において「陰陽の氣」に関する言及が追加される点は、惠棟の「氣」に対する理解において、「陰陽の氣」の觀念がより強く意識されるようになったことを示唆すると言えよう。

一一 曆日

卦氣説における易と曆日との関連について、鈴木・小沢・濱の三氏はいずれも否認しない。三者のうち、鈴木氏は、「卦氣説は易の卦爻を十二月・二十四氣・七十二候・三百六十五日等の曆日と結合させ……」⁽¹⁴⁾と述べ、卦氣説に対するもつとも一般的な定義を示している。小沢氏の定義はおおむね軌を一にするが、鈴木氏の挙げた曆日の諸要素にさらに「四時」⁽¹⁵⁾を加える。濱氏は、卦氣説を構成する曆日として、四時・二十四氣・七十二候のみを挙げているが、その後述の趣旨から判断すると、小沢氏の理解と相違がない。

むしろ濱氏は「卦気説は曆法と易の卦爻の牽連関係として把握すべきものであり、実に陰陽消長観にもとづく易の原理そのものによって構成されている」と述べ、易と曆法の結びつきを前面に押し出しつつ、陰陽消長の原理を卦気説の「実」として捉える点に特徴がある。

しかしその一方で、卦気の気を暦日として定義する研究が存在し、そのうち、卦気の気が陰陽の気ではないと強く主張する説も見られる。これらの研究はまた、「二十四気」説、「季節・気候」説、「時（四時・節気）」説の三つに分かれる。

1 二十四気

卦気の気を二十四気と解する説は、中国において比較的早い時期に刊行された二部の『周易』辞典において確認できる。一つは張其成主編『易学大辞典』もう一つは呂紹綱主編『周易辞典』である。

前者は「卦気」の項において「卦は八経卦・六十四別卦を指し、気は二十四節気を指す」と明記した後、四正卦を四時に、残り六十卦を三百六十五日四分の一に、さらに十二消息卦を十二辰および七十二候に配当する体系を列挙しつつ説明を加える⁽¹⁸⁾。しかし、その解説を仔細に見ると、冒頭に示された定義と、その後展開される具体的な対応関係との間には、完全に一致しない部分が存在する。後者もまた、「卦気」

の項において気を二十四氣と理解することを示すが、「卦氣図」の項において、六十四卦と四時・十二月・二十四氣・七十二候との対応を用いて孟喜の卦氣説を解説する¹⁹。辞典という性格上、研究論文とは異なり、複数の執筆者・編者が関与している可能性を考慮すれば、こうした記述上の不統一については、ここでは過度に立ち入って論じないこととする。

卦氣の気を二十四氣とする立場は、定義と解説の間に見られる揺れとともに、十数年後に刊行された梁韋弦『漢易卦氣学研究』へと受け継がれた。梁氏の定義は主に四つの資料に基づくが、第一に挙げられたのは、前述した『新唐書』に引かれる一行の「卦議」である。梁氏の引用箇所を下線を付し、その関連する文脈を合わせて示すと、

- ①十二月卦 孟氏章句より出づ。其れ易を説くに氣に本もとき、而る後に人事を以て之を明らかにす。
- ②京氏 又卦爻を以て期の日に配す。坎・離・震・兌は、其れ用事するに分・至の首よりし、皆八十分日の七十三を得。頤・晉・井・大畜は、皆五日十四分なり。餘は皆六日七分なり。災眚と吉凶・善敗の事を占ふに止まり、陰陽の變を觀るに至りては、則ち錯亂して明らかならず。……
- ③當に孟氏に據るべし。④冬至の初めより、中孚用事し、一月の策、九六・七八、是れ三十を為す。卦は地の六を以てし、候は天の五を以てし、五六相乗じ、消息一變し、十有二變して歲初めに復もとる。⑤坎・震・離・兌、二十四氣、次いで一爻を主り、其の初は則ち二至・二分なり。⑥坎陰を

以て陽を包み、故に北正よりし、微陽 下に動き、升りて未だ達せず、二月に極まり、凝潤の氣消え、坎の運終はるなり。春分 震より出で、始めて萬物の元に據りて、内に主と為れば、則ち羣陰化して之に従ふ。南正に極まり、豐大の變 窮まり、震の功 究まるなり。離 陽を以て陰を包み、故に南正よりし、微陰 地の下に生じ、積みて未だ章らかならず、八月に至り、文明の質 衰へ、離の運終るなり。仲秋に陰 兌に形れ、始めて萬物の末に循ひ、内に主と為れば、羣陽 降りて之を承け、北正に極まり、天澤の施し 窮まり、兌の功 究まるなり。⑦故に陽・七の靜は坎に始まり、陽・九の動は震に始まり、陰・八の靜は離に始まり、陰・六の動は兌に始る。故に四象の變、皆 六爻を兼ね、中・節の應 備はれり。……²⁰【資料一】。

となる。梁氏の引用箇所は上掲の①・③・⑤に相当する。氏の引用部分のみに即して見る限り、「氣」を二十四氣と解することも、解釈の一可能性としては否認できない。しかし、その妥当性は、前後の文脈とあわせて検討する必要がある。実際、梁氏に言及されていない②・④・⑥⑦を考察した場合、卦氣の氣を二十四氣と限定的に捉えるのは、かなり無理を覚えさせる。

②は京房の卦氣理論、六日七分の法について述べている。本来、六日七分の法は坎・震・離・兌の四正卦が直接に直日せず、残りの六十卦で期年の日と配当する構造である。京房の場合、四正卦は冬至・春分・夏至・秋分の四つの日に対応させられる。ただし年間の日数が原則として一定するため、坎・震・

離・兌に配当されるべき日分は、冬至・春分・夏至・秋分の直前まで直日している頤・晋・井・大畜の各卦から割り振る。その結果、諸卦に配当される日数には不整合が生じ、こうした点で一行の「卦議」において批判の対象となった。理論の優劣はひとまず措くとして、六日七分の法が卦氣説の代表的な理論の一つであることは否認し得ない。六日七分の法は主に六十（四）卦と期年の日との対応の構築を志向するものであり、二十四氣を中心に据える体系とは異なる。

④は六十卦用事の月について述べる部分である。冬至という暦日の起点より中孚の卦がつかさどる。一か月は三十日とする。一卦は六爻があり、一候は約五日間に相当する。それで一か月・六候における陰陽の変化は、おおむね五卦によって描き出せる。冬至を中氣とする十一月を例にすれば、当該月には復・中孚・頤・蹇・未済の五卦が対応づけられる。このような配当が十二回繰り返されると、一年が完結し、再び冬至の起点に復帰する。要するに、六十卦用事の月は、六十卦と十二月との対応関係を理論の中核に据えるものであり、七十二候への言及はわずかに見られるものの、二十四氣との直接的な関連はほとんど確認できない。

⑥⑦は、『周易』説卦に見られる「帝震より出づ（帝出乎震）」の章を敷衍したものであると考えられる。⑥微陽が北方より下において動き始めるが、すぐ表に現われない。春分に至って、陽が主となり、諸々の陰を従える。それに対し、微陰が南方より下において動き始めるが、直ちに顕著にならない。仲秋に至って、陰が主となり、諸々の陽が降ってこれを受ける。これを陰陽の数および易卦の体系で言い換え

ると、⑦少陽・七の静は坎に始め、老陽・九の動は震に始め、少陰・八の静は離に始め、老陰・六の動は兌に始める、となる。次の一文は注目すべきである。次いで、四時の推移はいずれも六爻を兼ね備え、中・節との対応が完備すると述べられる。「帝・震より出づ」の章における四時の推移に伴う生物の生長・収蔵が、「卦議」においては、二十四氣と四正卦・二十四爻構造を基盤とする陰陽の消長変化として、より精緻に説明されている。

孟喜と京房はともに漢易卦氣説を集成した者として位置づけられるため、卦氣の「氣」概念を検討するにあたっては、両者の説をあわせて視野に収める必要がある。「卦議」は、孟喜の卦氣説について、卦爻と四時・十二月・二十四氣・七十二候との対応関係に言及している。同時に、京房の卦氣説については、易卦と期年の日の配当関係を取り上げている。このように多層に展開される卦氣理論を、「二十四氣」という一義でまとめようとするのは極めて困難である。

しかしながら、上記の問題は、『易緯是類謀』および『易漢学』からの引用においても確認される。梁氏によって、『易緯是類謀』からの引用とされる文は、通行本『易緯是類謀』には見え、むしろ『易緯稽覽図』に、

冬至の日は坎に在り、春分の日は震に在り、夏至の日は離に在り、秋分の日は兌に在り。易緯是類謀は此の①四正の卦は卦に六爻有り、爻一氣を主り、②餘の六十卦は卦六日七分を主るを以てす【資

料二】。

と記されている。氏の引用は①に限られ、②に示される六日七分の法には触れていない。

『易漢学』からの引用および後続の文は、

①孟氏の卦氣圖は、坎・離・震・兌を以て四正卦を爲し、餘の六十卦、卦六日七分を主り、周天の數に合せしむ。内に辟卦十二あり、之を消息卦と謂ふ。乾盈つれば息と爲り、坤虚すれば消と爲る。其の實乾・坤の十二畫なり。②繫辭に云ふ、乾の策は二百一十有六、坤の策は一百四十有四なり、と。凡そ三百有六十期の日に當る。夫れ二卦の策を以て一期の數に當れば、則ち二卦の爻一歳の用を周るを知るなり。③四卦四時を主り、④爻二十四氣を主る。⑤十二卦十二辰を主り、⑥爻七十二候を主る。⑦六十卦六日七分を主り、爻三百六十五日四分日の一を主る【資料三】⁽²³⁾。

となる。梁氏が取り上げたのは①に限られ、③四正卦と四時、④四正卦の二十四爻と二十四氣、⑤十二消息卦と十二辰、⑥十二消息卦の七十二爻と七十二候、さらに⑦六十卦と三百六十五日四分の一との対応關係については、一切言及していない。

一方、梁氏は、『易漢学』に引かれる『周易參同契』君子居室の文（下線部）、

君子其の室に居り、其の言を出でて善なれば、則ち千里の外之に應ず。謂へらく、萬乗の主、九重の室に處り、號を發して令を出だすは、陰陽の節に順ひ、器を藏して時を俟ち、卦月に違ふこと勿れ【資料四】。

に基づき、「月」が具体的な暦法概念であるならば、「氣」も具体的な暦法概念であると類比的に解釈する。²⁵⁾ また『易漢学』の本文【資料三】①とあわせて用い、卦氣と陰陽二氣との関連を一定程度認めつつ、卦氣の氣を陰陽の氣ではなく、易卦に対応づけられる「節氣」として位置づける。²⁶⁾ しかしながら、『周易参同契』における「卦月」概念そのものが未詳であるため、「卦月」との類比を通じて卦氣の氣を特定することには、方法上の留保が必要である。加えて、資料三の①は明確に期年の日に着目する六日七分の法と、十二月を統べる十二消息卦について述べており、「節氣」を重点に据える論ではない。さらに惠棟の「氣」理解が前述もしたように、早期の「太初の氣」から「陰陽の氣」へと重点を移しつつ展開する点を踏まえれば、その叙述から直ちに「節氣」を導き出すことは、論理の飛躍を免れない。

2 季節・氣候

十二月・二十四氣・七十二候・期年の日などとの対応を目指した多様な卦氣理論は、「二十四氣」という単一の概念に還元し得るものではない。それにもかかわらず、梁氏の議論においては、二十四氣という「氣」概念を基盤とする卦氣説の範囲が拡張され、結果として多様な卦氣理論を包摂し得る枠組みとして再構成されるようになった。梁氏の論証過程は、次の二段階にまとめられる。一つは、「卦議」などの関連文献を引いて卦氣の氣が二十四氣であると弁じ、もう一つは、「卦月」との類比を通じて、卦氣の氣が曆法概念として把握されるべきと論じる。仮に卦氣の氣が曆法概念である場合、「二十四氣」に代えて、より包括的に卦氣理論全体を整理し得る概念を用いる選択肢は、理論的には考えられる。

実際、そのような試みは少なくない。鈴木由次郎氏は「暦日」という概念を用い、それは辛賢『漢易術数論研究』、藤田衛『易緯稽覽図』に見えたる卦氣説⁽²⁸⁾など後続の研究にも見られる。濱久雄氏は直ちに「曆法」と表現する。朱伯崑『易学哲学史』は「二年にわたる節氣の変化」と捉え、呂紹綱主編『周易辞典』「卦氣図」の項は同様である。張善文『周易辞典』「卦氣」の項は「十二月氣候」とする⁽³¹⁾。しかし、以上に挙げた諸説はいずれも卦氣の氣を曆法概念として明記しておらず、むしろ氣を陰陽の氣と理解する立場も存在する。これに対して、王葆玟「西漢『易』学卦氣説源流考」は、『易緯稽覽図』の鄭玄注によれば、いわゆる「卦」は六十四卦を指し、「氣」は卦と対応する季節・氣候である」と述べ⁽³²⁾、卦氣の氣を曆法の枠組みの中に位置づけ、さらに「季節・氣候」という観点を明示する点で、注目に値する。

王氏の研究は、その題目が示すとおり、卦氣説形成の思想背景、十二月卦・六日七分の法などをめぐる帰属問題、卦氣説発展の段階区分などを重点に論じるものである。『稽覽図』の鄭玄注がいかに解釈されているか、卦氣の氣と陰陽の氣がいかに関連するかについて、直接的な言及はされていない。王氏が用いる「季節・氣候」という定義は文面上、四時・二十四氣・七十二候と理解してよからうが、そうすると、十二月や期年の日との対応関係はいかに位置づけるべきかについて、疑義が生じ得る。しかし、後続の叙述を精査すると、王氏の卦氣説理解は、十二月と期年の日との対応をも包含するものであり、この点において、前述した小沢氏の見解と実質的に一致する。小沢氏と大きく異なり、また、多くの先行研究においても特に注目されるのは、王氏が『漢書』魏相伝に記される震・離・兌・坎・坤艮と春・夏・秋・冬・中央との対応理論を、卦氣説の定義の範疇に収め、それを四正卦の雛形と見なすと同時に、卦氣説の起源・卦氣説発展の第一段階として定める点である。⁴³⁾ 加えて、従来、『周易』説卦伝の「帝震より出づ」の章は、卦氣説の発展を貫く四正卦理論の出典と目されながら、卦氣説との具体的な関連については十分に解明されてこなかった。これに対し、王氏の考察では、説卦伝は、上述した魏相の易理論の基盤を成す「易陰陽」そのものとして見直される。上記の理解に立てば、説卦伝から魏相へ、そして孟喜から焦延寿へ、京房から京房の弟子へと連なる卦氣説の発展過程は、一貫した理論史として把握可能となる。この点こそが、王氏による「季節・氣候」という定義づけのもつとも注目されるべきところであると言えよう。

3 「時（四時・節氣）」

卦氣説の先驅を孟喜から魏相にまで遡らせ、あわせて説卦伝との関連をも論じ得たのは、坎・震・離・兌―冬・春・夏・秋という四正卦構造が重要な手がかりとなっていると考えられる。それに対し、邢文『帛書周易研究』は、同じ四正卦構造に依拠しつつ、魏相よりも時期の早い『帛書周易』に卦氣説の存在が認められると指摘する。『帛書周易』要篇の中に、孔子は『易』の損・益二卦を読んで所感があり、

二凶（參）子、①夫れ損益の道、審察せざる可からざるなり。②吉凶の□なり。③益の卦爲るや、春に以て夏の時を授くるなり、萬勿（物）の出づる所なり、長日の至る所なり、産（？）の室なり、故に益と曰ふ。④損なる者は、秋に以て冬の時を授くるなり、萬勿（物）の老衰する所なり、長「夕の」至る所なり、故に産（損）と曰ふ。道窮まれば□□□□□□□□。⑤「益の」始まるや吉なり、元（其）の冬（終）はるや凶なり。⑥損の始まるや凶なり、元（其）の冬（終）はるや吉なり。⑦損益の道、以て天地の變を觀るに足りて、君者の事なるのみ。³⁴

と弟子たちを戒める記述がある。①孔子は弟子に対し、損益の道を慎重に考察すべきであることを勧める。

それは、②損益の中に、吉・凶を分かつ要点が内在するからである。⑤⑥ここで示される吉凶観は、終始一貫して固定されたものではなく、始まりが吉であっても終わりが必ずしも吉に帰着するとは限らず、またその逆も成り立つという動的な理解に立脚している。⑦損益の道は、天地の変化を観察するに足る原理であると同時に、君主が拠るべき実践的規範として位置づけられる。このように、損益の道は自然界における変化の法則にとどまらず、人間の行動規範としても把握され、天地の運行に貫く普遍的原理として理解されている。加えて、この原理は、③④四時の推移に伴う万物の成長・収蔵、ならびに昼夜の長短の変化を通じて、具体的に感得され得るものとされる。邢氏は、こうした思想的構造の中に、卦氣説の存在が認められると主張する。

具体的には、③春から夏へと移行する過程において、万物が生成・成長し、昼の長さが極まってく。この過程は益の卦によって象徴される。④秋から冬へと移行する過程において、万物は老衰へと向かい、夜の長さが極まってく。この過程は損の卦の象徴するところである。③「春に以て夏の時を授くるなり」については、以下のとおりとおりに説明される。益(䷗)は、内卦が震(䷲)、外卦が巽(䷸)である。内卦の震は卦象が雷・春であり、外卦の巽は卦象が風・夏初である。また、『旧唐書』曆三の卦氣表において、益の卦は正月節・立春の末候に配されている。³⁵④「秋に以て冬の時を授くるなり」については、以下のとおりと説明される。損(䷨)は、内卦が兌(䷹)、外卦が艮(䷳)である。内卦の兌は卦象が毀折・秋であり、外卦の艮は卦象が尾・終・冬末である。また、『旧唐書』曆三の卦氣表において、損の卦は七

月中・処暑の初候、すなわち立秋（七月節）の次氣に配されている⁽³⁶⁾。このように四正卦と四時との対応を理論の中軸と据える卦氣理解は、邢氏によって「四象卦氣」と称される。

邢氏は、王葆玟氏のように人物の活躍時期を卦氣説の展開を区分する方法を取らず、曆日そのものを基準として卦氣理論を二分する。一つは「四時卦氣」、もう一つは「易卦節氣」である。「四時卦氣」には上記の「四象卦氣」に加え、八卦と四時・八月との対応に着目する「八卦卦氣」をも含める。「易卦節氣」は、七十二候などとの対応関係を中心に構成される⁽³⁷⁾。卦氣説を「四時」と「節氣」によって二分する整理は細部において必ずしも十分とは言いがたいが、「六十四卦と四時・節氣の推移が相対応する学説は、すなわち卦氣説である⁽³⁸⁾」という邢氏自身の定義とは整合的である。そうして、邢氏は、損益二卦に季節の卦象が含まれることを踏まえ、卦氣の氣を「四時・節氣」と規定し、さらに「時」と言い換えた。

邢氏は、「氣」を「時」と解釈するに先だって、次の二点について論証を行っている。

第一は、主として『周易』繫辭伝の記述に依拠し、卦・象・変・時の相互関係を明らかにする点である⁽³⁹⁾。卦は象に対する観察を通じて立てられ、象は再び卦から派生する⁽⁴⁰⁾。象には変の義があり、その変の義を具体的に体现するものは、四時にまさるものはない⁽⁴¹⁾。このようにして、損益二卦の中に、四時の推移を始めとする天地変化の原理が内包されることが示され、その理論的基礎が確立される。

第二は、一行「卦議」に見られる孟喜の卦氣説と、『京氏易伝』に見られる京房の卦氣説とを手がかりとして、「時」と「氣」との相互関係を検討する点である⁽⁴²⁾。一行「卦議」では、前述もしたように、一年

の二十四氣に四正卦の二十四爻が配当されるとともに、四時の推移に伴う陰陽の消長変化が坎・震・離・兌の四正卦によって象徴される。『京氏易伝』に見られる京房の卦氣説は、陰陽の運行について、陰陽が十二支にそつて運行し、陽は子より左へ時計回りし、陰は午より右へ反時計回りに巡行すると説明される。また、卦爻と時との対応については、六つの子卦の初爻・四爻を二十四氣に配当する体系⁽⁴⁵⁾、六十四卦・三百八十四爻・万一千五百二十策によって「二十四氣候」を定める体系⁽⁴⁶⁾の二種が提示されている。

要するに、孟喜と京房の卦氣理論は、卦と時との対応関係を構築すると同時に、時の推移に伴う陰陽二氣の運行を重視する点に共通性を有する。上記の検討を通じて、邢氏は、第一に象・変を媒介とする「卦」と「時」との関連を間接的根拠とし、第二に「氣」と「時」との対応を直接的根拠として、卦氣の氣はすなわち「時」であるという結論に到達するのである。

三 陰陽五行の氣・暦日

卦氣の「氣」概念をめぐっては、その内実の理解にとどまらず、卦氣の氣と陰陽の氣といかなる関係において把握すべきかという点についても、研究者の間で立場の相違が見られる。梁韋弦氏は、卦氣の氣を陰陽の氣と切り離して理解しようとし、「二十四氣」説を主張する。王葆珪氏は陰陽の氣に言及すること

なく、卦氣の氣を「季節・氣候」と規定する。これらに対し、邢文氏は、卦氣を論じるにあたっては陰陽の氣とあわせて考察することが不可欠であると指摘し、卦氣の氣を「四時・節氣」と理解する点では王葆珪氏の定義に近い立場を取りつつ、さらに「時」という概念に言い換える。また邢氏は、卦氣の氣と陰陽の氣との関係について、陰陽の氣の消息盛衰は卦氣の氣の運行、すなわち四時・節氣という時間的枠組みの中で展開されるものであると述べる。⁽⁴⁸⁾ 邢氏の立場は、第一に、陰陽の氣が四時・節氣の推移に応じて消長するものとして理解されていること、第二に、卦氣の氣が四時・節氣と同様に「時」として把握されていることの二点に整理できよう。

卦氣説を扱った近年の新たな研究として、劉春雷「『卦—氣』含義与卦氣思想發源考」は、邢氏よりさらに一歩進んで、卦氣の氣には陰陽の氣と曆日という二重の意味が含まれると提示する。劉氏の定義は、「卦氣の氣は明確な時間的区分をもつ四時・十二月・二十四氣・七十二物候ないし三百六十日（六日七分の説）を包含するのみならず、その背後にあつて、形をとらず消息し、流動して止まることのない陰陽二氣をも包含する⁽⁴⁹⁾」となる。また劉氏は、この二重の意味には先後関係が存在し、まずは陰陽・五行の氣機の変化であり、その次に時令・年月・節氣・物候として表象されると指摘する。⁽⁵⁰⁾ このような劉氏の見解は、一方では梁韋弦氏によつて切り離されていた陰陽の氣を卦氣説の議論の中に再び位置づけ、陰陽の氣を曆日よりも先に位置づける。他方では、氣機の変化を曆日に先行する内在的な原動力とし、曆日の推移や物候の変化を、氣機の変化が一定の段階に達した際に現われる外在的な表徴として捉える。

さらに注目されるのは、卦氣の氣を定義するにあたり、劉氏が陰陽の氣にとどまらず、「陰陽五行の氣」として把握している点である。卦氣の氣に五行を明示的に組み込む見解は、先行研究においては、前述の小沢氏による「蓋し陰陽の氣、即ち天地・四時・日月・五行の変化生成である」という指摘を除けば、まだ見当たらない。劉氏の考察において、卦氣の氣と五行との関係については一度触れられるにとどまり、詳細な展開はされていない。しかしながら、卦氣の「氣」概念を検討するにあたって、陰陽の氣のみならず五行の氣をも視野に収める必要性を示唆している点は、看過すべきではない。

たとえば、京房易に通曉する谷永は、奏疏の中で、

王者 道德を躬行し、天地に承順し、……事を節し財 足り、黎庶 和睦すれば、則ち卦氣 理りて
効あり、五徴 時序あり、百姓 壽考し、庶民 蕃滋し、符瑞 並びに降り、以て保右を昭らかにす。

と述べている。ここでは体系的な卦氣理論が直接に提示されていないが、卦氣は秩序正しく運行して効驗があり、雨・暘・燠・寒・風という五徴が時序に従って現われるこの奏文は、卦氣説と五行觀念との間に
関連が想定されていると解し得る。

また、『易緯通卦驗』には、

乾は西北なり、立冬を主る。人定に白炁出で、乾に直す。……坎は北方なり、冬至を主る。夜半に黒炁出で、坎に直す。……艮は東北なり、立春を主る。雞鳴に黄炁出で、艮に直す。……震は東方なり、春分を主る。日出に青炁出で、震に直す。……巽は東南なり、立夏を主る。食時に青炁出で、巽に直す。……離は南方なり、夏至を主る。日中に赤炁出で、離に直す。……坤は西南なり、立秋を主る。晡時に黄炁出で、坤に直す。……兌は西方なり、秋分を主る。日〔入〕に白炁出で、兌に直す。⁽⁴⁾

という記述が見られる。八卦は八方・八節と対応し、それぞれの卦・方位・節気において現われる気には一定の色が付与される。しかも、それらの色は合計して五種に整理され得ることから、ここに示される「気」は五行の属性を帯びるものとされる可能性が高い。

劉氏の研究は、題目に示されるとおり、卦・気の意義の解明にとどまらず、卦気説の起源をあわせて考察するものである。冒頭で述べたように、卦気の定義のあり方は、卦気説の形成につながっており、この点は以下の先行研究においてなお明確に表われている。もし梁韋弦氏の指摘するように、卦気の気が二十四気を指すとするならば、卦気説の起源は論理的に見て、二十四気の成立以前にまで遡ることはできない。完備した形での二十四気の記録は、前漢武帝期に進呈される『淮南子』時則訓において始めて確認されるため、梁氏の「二十四気」説は、卦気説の成立が宣帝期の孟喜に求める通説と整合的に理解し得る。これ

に対し、王葆玟氏は、卦氣の氣を「季節・氣候」と定義することによって、卦氣説の成立を孟喜以前、魏相にまで遡らせる立場を取る。「時（四時・節氣）」説を採る邢文氏は、魏相よりもさらに時期の早い『帛書周易』要篇において卦氣説の存在を確認できると指摘する。それでは、卦氣の氣が「陰陽（五行）の氣」と定義される場合、卦氣説の起源はいかに求められることになるのか。

卦氣説の起源に関する先行研究の中で、劉大均「卦氣」溯源⁵⁵は比較的早い段階で発表され、多くの注目を集めたものである。劉氏はまず、師承関係の整理を通じて、孟喜の師である田王孫と卦氣との関連性を推測する。次いで、前漢宣帝期の魏相と武帝期の夏侯始昌の学説も卦氣に関わると指摘し、前漢初期の段階で卦氣説がすでに存在するとの見解を示す。さらに、『周易』象・象・繫辭・説卦などの諸伝を順次検討し、これらの文献に卦氣説が存在する可能性を探る。最後に、殷墟卜辞と戦後京津甲骨の四方風名に四正卦が含まれること、ならびに『尚書』堯典にも卦氣に関わる要素を含むことを論証する。劉大均氏は卦氣について明確な定義を与えていないが、引用される文献の中に「陰陽」への言及が多く含まれている。

劉春雷氏は、劉大均「卦氣」溯源⁵⁶を始めとする諸研究を継承しつつ、一定の反省と理論的刷新を加える。氏は、孟喜を嚆矢とする卦氣説が歴史の表舞台に現われた時点にすでに一定の理論の完成度を備えていることを踏まえ、それ以前の思想的展開については、潜在的な形で展開していた可能性を暗示する。劉春雷氏は殷商甲骨に見られる四方風のみならず、劉大均氏に言及されなかった四方土にも注目し、前者

を「天气」、後者を「地气」とそれぞれ位置づける。四方風は四時の推移とともに変化し、自然界の成長・収蔵に作用するだけでなく、祭祀の対象とされ、吉凶禍福にも関わる。四方土もまた穀物の生育に影響を及ぼし、大地祭祀の重要な対象とされる。四方風と四方土はともに、早期における四方・四時観念の存在を如実に示すものである。⁶⁷⁾ それにしても、卦気説と甲骨文との関係について、劉春雷氏は劉大均氏に比してより慎重な態度を示す。四方風と四方土に「氣」と「時」の要素が認められる点は肯定しつつも、卦名が明示されていないため、後世の四正卦および卦気説と主旨が一致すると述べるにとどまる。その結果、卦気説の遡源は、『周易』坤・臨・復などの卦辞にまで遡る段階にとどめられている。⁶⁸⁾

おわりに

ここまで本稿は、漢代易学における卦気説の「氣」概念に関する先行研究のうち、とりわけ「氣」に対する理解が明示されるものを対象に、それらを大きく三つの類型に整理したうえで、各説が依拠した資料を再検討してきた。

その結果、卦気説の気に対する諸定義は、先行研究の主張に見られるほど明確な対立関係にあるわけではないことが明らかになった。「氣」を「陰陽の氣」と定義する鈴木由次郎・小沢文四郎・濱久雄の三氏

はいずれも、易と暦日との関連を否定してはいない。また、「二十四気」を強く主張する梁韋弦氏においても、陰陽の気は「気」の定義から除外されるものの、卦気説の基本原理として否定されているわけではない。さらに、「時（四時・節気）」説を主張する邢文氏は、「陰陽の気」を四時・節気、すなわち暦日の推移に即して消長するものとして捉える。それに対し、劉春雷氏は、「陰陽五行の気」と暦日という二つの側面を併用して卦気の気を解釈し、前者を内在的な原動力、後者を外在的表徴として位置づけている。

一方、卦気説の形成時期が、「気」の定義の相違によって大きく異なってくる点も、あわせて確認された。「二十四気」説を採る梁韋弦氏は、卦気説の成立を前漢宣帝期の孟喜に求める。気を「季節・氣候」と定義する王葆琰氏は、「季節」と対応する四正卦構造を手がかりに、卦気説の成立を孟喜以前の魏相にまで遡らせる。「時（四時・節気）」説を主張する邢文氏は、魏相よりさらに時期の早い『帛書周易』に卦気説の存在を認め、しかも、卦気説の成立時期を『帛書周易』よりさらに遡らせ得る可能性は排除しない。これに対し、卦気の気を陰陽五行の気・暦日と捉える劉春雷氏は、乾の卦形「☰」と甲骨文に見られる「氣」との形態的類似性を指摘し、卦気説の淵源を『周易』坤・臨・復などの卦辞にまで遡らせ、殷墟卜辞に見られる四方風・四方土と卦気説との関連をも肯定的に捉える。

以上の整理を踏まえると、卦気説の「気」概念を定義するにあたっては、少なくとも次の三点について、なお検討を要する。

第一に、易の卦爻に対応する暦日の範囲をいかに定めるかという問題である。管見の限り、十二月・二

十四氣・七十二候・期年の日については、先行研究の間で大きな異論は見られない。しかし、四時については見解が分かれ、十干・十二支は、検討の対象から外されることが多い。四時は『漢書』魏相伝に見られる魏相の学説に、十干は『京氏易伝』などに見られる納甲説に、十二支は『京氏易伝』・『易緯乾鑿度』・『周礼』春官の鄭玄注などの諸文献に見られる爻辰説に、それぞれ関わっている。暦日の範囲を定めることは、卦気説の範疇を定めることでもある。

第二に、「陰陽の氣」と暦日の相互関係をいかに理解するかという問題である。この点については、梁韋弦・邢文・劉春雷の三氏によって一定の整理が蓄積されてきた。梁氏は、卦氣の氣を暦日の一要素である「二十四氣」に限定しつつ、陰陽の氣を卦気説の基本原理として位置づける。しかし、卦氣の氣を暦日と見なす根拠は必ずしも十分とは言いがたく、氏が挙げた一行「卦議」や『易緯是類謀』の用例を踏まえても、検討の余地を残している。また、「陰陽の氣」と暦日の両義を併用して卦氣の氣を解釈する劉春雷氏の立場についても、なお理論的整理が必要であると言えよう。

これに対し、陰陽の氣を暦日にそって消長するものと捉える邢氏の理解は、漢代における自然觀・宇宙觀と親和性が高い。『易緯乾鑿度』の注に示されるとおり、太初は氣に寒温が初めて生じる段階である。また、『周易』繫辭下に「寒 往けば則ち暑 來り、暑 往けば則ち寒 來たり、寒暑 相 推して歲 成る」とあり、寒温が押し合いながら一年の循環が完成することが語られる。陰陽の氣と暦日の循環との密接な関係は端的に示されている。ただし、陰陽の氣と暦日との間に、なぜ上記した対応関係が成立し得るかと

いう原理の説明は、邢氏の考察において直接的にされていない。実際、陰陽の氣と曆日の関連は、『史記』太史公自序および『漢書』芸文志における陰陽家に対する紹介文から窺える⁶⁰。一方、卦氣説は易を基本的枠組みとする以上、陰陽の氣と曆日との関係については、易・陰陽・曆日の三者間の相互関連として検討すべきではないかと考えられる⁶¹。

第三に、卦氣説における「五行」の位置づけである。本稿で取り上げた先行研究のうち、卦氣説に「五行」を肯定的に捉えるのは、小沢文四郎「卦氣説について」と劉春雷「「卦—氣」含義与卦氣思想發源考」だけである。しかしながら、京房易に詳しい山谷永が奏疏において卦氣を五徴と並置して論じること、『易緯稽覽図』の八卦卦氣構造において「炁」が五色を備えること、さらに納甲説において十干と五行との対応が整備されていることなどを踏まえれば⁶²、卦氣説の理論構造に五行的要素を認める余地は、あらためて検討される必要がある。

以上の三点に基づき、卦氣説の「氣」は、陰陽を基調としつつ、五行的要素をも含むものとして理解する可能性が示唆される。他方、曆日は「氣」概念そのものではなく、卦氣理論の構造上、陰陽などを媒介として易の卦爻に配当される要素として把握するのが、一つの整理の方向として考えられよう。卦氣説と対応する曆日の範囲については、鈴木氏のいう「十二月・二十四氣・七十二候・三百六十五日等」が、現段階では比較的妥当な見解として位置づけられる。四時・十干・十二支についても、この範疇に位置づけ得る可能性を含みつつ、今後なお慎重な検討を要する課題として残される。

最後に、卦氣説の定義と密接に関わる卦氣説の形成時期について付言しておきたい。卦氣の氣を「陰陽五行の氣」として捉える立場に立つ場合、卦氣説が成立するための理論的前提は、陰陽五行の氣が時間的秩序と結びつき、かつ易と関連づけられる段階において、すでに一定程度整っていたと考えることも可能であろう。しかしながら、この点については資料の制約が大きく、積極的に論証することも、また明確に否定することも困難である。したがって、卦氣説の氣を「陰陽五行の氣」と定義する場合であっても、その淵源を過度に遡って措定することを、漢代易学における卦氣説研究の主要な目的とすることは、必ずしも現実的とは言えない。一方、卦氣説が政治的理論として歴史上に登場し、実際に影響力を及ぼすようになるのは、前漢宣帝期以降であることはほぼ疑いない。以上を踏まえるならば、卦氣説の成立時期そのものではなく、歴史資料によって確認可能な形で登場する時期を、漢代易学における卦氣説研究の対象期間の起点とする立場は、より妥当なものと考えられる。

【注】

(1) 漢世大儒言易者、多宗之（清）李道平撰、潘雨廷点校『周易集解纂疏』、北京…中華書局、一九九四年、周易集解纂疏諸家説易凡例、十二頁）。

(2) 鈴木由次郎『漢易研究』（増補改訂版）、東京…明德出版社、一九七四年、第二部 漢代象数易の研

究Ⅴ第二章 象数易の展開Ⅴ第二節 卦氣、二〇六頁。

(3) 先行研究のうち、卦氣説の「氣」概念が明示されておらず、文脈から著者の見解を推測せざるを得ないものが少なくない。本稿では、解釈上の恣意性を回避するため、できる限り研究対象を、「氣」に対する理解が明示されている研究に限定する。一方、「暦日」という語は、鈴木由次郎氏による卦氣説の定義、すなわち「卦氣説は易の卦爻を十二月・二十四氣・七十二候・三百六十五日等の暦日と結合させ……」（『漢易研究』（増補改訂版）、東京・明德出版社、一九七四年、第二部 漢代象数易の研究Ⅴ第二章 象数易の展開Ⅴ第二節 卦氣、一七〇頁）に見られる表現である。本稿における「暦日」の義は、基本的にこの鈴木氏の定義に依拠する。ただし、「四時」が加えられる場合や、一年の日数が「三百六十日」「三百六十五日四分の一」などと記される場合も、同じく「暦日」の範疇に含めて理解する。

(4) 鈴木由次郎『漢易研究』（増補改訂版）、東京・明德出版社、一九七四年、第二部 漢代象数易の研究Ⅴ第二章 象数易の展開Ⅴ第二節 卦氣、一七〇頁。

(5) ①甲子卦氣起中孚。「注」②卦氣、陽氣也。中孚、卦名也。中者、和也。孚者、信也。經言、中孚、豚・魚（言）「吉」、庶人養也。舉庶人言之、其所養微也。言微③陽生於坎、④而為雷聲、尚未聞於人、而知於⑤律曆俞助作也。若言天子出耕、諸侯當而耕也、故以言之。……④陰還雨、陰威（色）「也」。「注」還暴陰。⑥陽生於坎、⑦氣尚微、寒温未知、萬物變形、律氣先得中孚、卦氣乃信愛而養之、故

言卦氣起中孚也（清）趙在翰輯、鐘肇鵬・蕭文郁点校『七緯附論語讖緯』（上）、北京…中華書局、二〇一二年、易緯稽覽圖卷上、六八頁・七一頁）。本稿では、校勘によって文字に改訂が生じた場合には、改訂前の文字を（）、改訂後の文字を□によって示す。

（6）稽覽圖曰、甲子卦氣始中孚。「注」卦氣、陽氣也。中孚、卦名也。中者、和也。孚者、信也。經言、中孚、豚魚吉、庶人養也。舉庶人言之、其所養微也。言微陽生于坎、而氣尚微、寒溫未知、萬物變形、律氣先得中孚、卦氣乃信愛而養之、故言卦氣起中孚也（張惠言『易緯略義』、広州…広雅書局、嘉慶一九（二八一四）年跋、『易緯稽覽圖』（上）卷二卦氣、十二葉裏）。

（7）『淮南子』天文訓には、「黃者、土德之色。鍾者、氣之所種也。日冬至德氣爲土、土色黃、故曰黃鍾」とある。十二月と十二律の対応関係において、冬至を中氣とする十一月に配当されるのは黄鍾である。黄は五行における土の色であり、土行に「和」の徳があり（『管子』四時）、五常の「信」と対応する（『漢書』律歷志）。これは『易緯稽覽圖』の注に見える「中」と「孚」の積義に一致する。中孚の卦が卦氣の始動期、すなわち十一月冬至ごろに配置されるのは、このような思想的関連によるものである。詳しくは、朱伯崑『易学哲学史』（一）、北京…昆仑出版社、二〇〇九年、第二編漢唐時期Ⅴ第三章漢代的象数之学Ⅴ第一節孟喜和京房的卦氣說、一三八頁を参照。

（8）降陽為風、降陰為雨。昇氣上、降氣微。是故陽還、其風必暴。陰還、其雨亦暴。降陽之風、動不鳴條。降陰之雨、潤不破塊（清）趙在翰輯、鐘肇鵬・蕭文郁点校『七緯附論語讖緯』（上）、北京…中

華書局、二〇一二年、易緯稽覽図卷上、七〇―七一頁。

(9) 濱久雄『東洋易学思想論攷』、東京：明德出版社、二〇一六年、第一章 中国古代における易と暦法の牽連関係―卦氣説の構造と原理を中心として―、一三頁。初出は、小林春樹編『東アジアの天文・暦学に関する多角的研究』、東京：大東文化大学東洋研究所、二〇〇一年。

(10) 十二月卦出於孟氏章句。其說易本於氣、而後以人事明之（宋）歐陽脩・宋祁撰『新唐書』、北京：中華書局、一九七五年、卷二七上 志第一七上 曆三上、五九八頁。

(11) 小沢文四郎「卦氣説について」、『漢文学会々報』三、一九三五年、四 結語、五二頁。

(12) 易乾鑿度曰、①太易者、未見氣也。②太初者、氣之始也。康成注云、③太易之始、漠然無氣可見者。④太初之氣、寒温始生也。乾鑿度又云、⑤易變而為一。注云、⑥一主北方、氣漸生之始。此則太初之氣所生也（清）惠棟著、谷繼明校注『易漢学新校注 附易例』、北京：中国社会科学出版社、二〇二〇年、易漢学Ⅴ卷一 孟長卿、一二二頁。句読は適宜改めた。

(13) 孟喜弟子趙賓説易箕子之明夷、謂陰陽氣无、箕子當作芟滋（清）惠棟著、谷繼明校注『易漢学新校注 附易例』、北京：中国社会科学出版社、二〇二〇年、易漢学Ⅴ卷一 孟長卿、一二二頁、校訂四）。句読は適宜改めた。

(14) 鈴木由次郎『漢易研究』（増補改訂版）、東京：明德出版社、一九七四年、第二部 漢代象数易の研究Ⅴ第二章 象数易の展開Ⅴ第二節 卦氣、一七〇頁。

(15) 卦氣説とは上述の如く、一年四季・二十四氣・七十二候・十二月・三百六十五日四分日の一を陰陽の消息と見て、之に卦或は爻を配して説明したものである……(小沢文四郎「卦氣説について」、『漢文学会々報』三、一九三五年、二一卦氣説の種類、三二二頁)。

(16) 卦氣説とは『易経』の六十四卦を陰陽二氣の升降消息とみて、これを一年の四時(季節)・二十四氣・七十二候に配当したもので……(濱久雄『東洋易学思想論攷』、東京・明德出版社、二〇一六年、第一章 中国古代における易と暦法の牽連関係―卦氣説の構造と原理を中心として―、一二頁)。

(17) 濱久雄『東洋易学思想論攷』、東京・明德出版社、二〇一六年、第一章 中国古代における易と暦法の牽連関係―卦氣説の構造と原理を中心として―、一三頁。

(18) 張其成主編『易学大辞典』、北京・華夏出版社、一九九二年、四三〇頁。ほぼ同じ解説は「孟喜卦氣説」の項(四三〇―四三二頁)、「八卦卦氣説」の項(四三四頁)にも見られる。

(19) 呂紹綱主編『周易辞典』、長春・吉林大学出版社、一九九二年、三六七―三六九頁。

(20) ①十二月卦出於孟氏章句。其說易本於氣、而後以人事明之。②京氏又以卦爻配期之日。坎・離・震・兌、其用事自分・至之首、皆得八十分日之七十三。頤・晉・井・大畜、皆五日十四分。餘皆六日七分。止於占災眚與吉凶・善敗之事、至於觀陰陽之變、則錯亂而不明。……③當據孟氏。④自冬至初、中孚用事、一月之策、九六・七八、是為三十。而卦以地六、候以天五、五六相乘、消息一變、十有二變而歲復初。⑤坎・震・離・兌、二十四氣、次主一爻、其初則二至・二分也。⑥坎以陰包陽、故自北

正、微陽動於下、升而未達、極於二月、凝潤之氣消、坎運終焉。春分出於震、始據萬物之元、為主於内、則羣陰化而從之。極于南正、而豐大之變窮、震功究焉。離以陽包陰、故自南正、微陰生於地下、積而未章、至于八月、文明之質衰、離運終焉。仲秋陰形于兌、始循萬物之末、為主於内、羣陽降而承之、極於北正、而天澤之施窮、兌功究焉。⑦故陽・七之靜始於坎、陽・九之動始於震、陰・八之靜始於離、陰・六之動始於兌。故四象之變、皆兼六爻、而中・節之應備矣。……〔宋〕歐陽脩・宋祁撰

『新唐書』、北京：中華書局、一九七五年、卷二七上志第一七上曆三上、五九八―五九九頁。

(21) 卦氣説において、一年の日数は、三百六十日、三百六十五日、あるいは三百六十五日四分の一など、複数の可能性を含んでいる。本稿では、先行研究の記述を引用する場合には、原則として原文の表現に即して日数を示すこととする。一方、日数を厳密に特定する必要がない場合には、一行「卦議」の「期之日」、『左伝』の「期年、狄必至、示之弱矣」といった用例を踏まえ、「期年の日」という表現を用いる。

(22) 冬至日在坎、春分日在震、夏至日在離、秋分日在兌。易緯是類謀以此①四正之卦卦有六爻、爻主一氣、②餘六十卦卦主六日七分。(清)趙在翰輯、鐘肇鵬・蕭文郁点校『七緯附論語識緯』(上)、北京：中華書局、二〇一二年、易緯稽覽圖卷下、一〇六一―一〇七頁)。「餘六十卦卦主六日七分」の次に「八十分日之七」と続くが、「八十分日之七」は「七分」に対する注と理解すべきであろう。

(23) ①孟氏卦氣圖、以坎・離・震・兌爲四正卦、餘六十卦、卦主六日七分、合周天之數。内辟卦十二、

謂之消息卦。乾盈爲息、坤虛爲消、其實乾・坤十二畫也。②繫辭云、乾之策二百一十有六、坤之策一百四十有四。凡三百有六十當期之日。夫以二卦之策當一期之數、則知二卦之爻周一歲之用矣。③四卦主四時、④爻主二十四氣。⑤十二卦主十二辰、⑥爻主七十二候。⑦六十卦主六日七分、爻主三百六十五日四分日之一（清）惠棟著、谷繼明校注『易漢學新校注 附易例』、北京・中国社会科学出版社、二〇二〇年、易漢學Ⅴ卷一 孟長卿、一七一—一八頁）。句讀は適宜改めた。

(24) 君子居其室、出其言善、則千里之外應之。謂萬乘之主、處九重之室、發號出令、順陰陽節、藏器俟時、勿違卦月（章偉文訳注『周易參同契』、北京・中華書局、二〇一四年、君子居室章第四十二、一六七—一六八頁）。

(25) 「月」是具体的曆法概念、那麼、「氣」也是具体的曆法概念（梁韋弦『漢易卦氣學研究』、濟南・齊魯書社、二〇〇七年、第一章 漢易卦氣學的主要內容Ⅰ 卦氣概念之出現及其基本含義、三三頁）。

(26) 雖然其原理與陰陽二氣之運行消長有關、但漢人所謂卦氣已不是模糊地泛指陰陽二氣、而是以易卦與之相配的節氣之氣（梁韋弦『漢易卦氣學研究』、濟南・齊魯書社、二〇〇七年、第一章 漢易卦氣學的主要內容Ⅰ 卦氣概念之出現及其基本含義、三三頁）。

(27) 「卦月」の概念については、以下の三種の理解が可能である。第一は、一年を構成する十二か月を、『周易』の十二消息卦によって統御するものとする理解である。第二は、一か月三十日を一日につき二卦ずつ配当し、乾・坤・坎・離の四卦を除く六十卦を、『周易』序卦伝の配列順に従って割り当て

るとする理論である。第三は、一か月の鍊丹過程における火候の推移および陰陽の消長変化を、初三を震、初八を兌、十五を乾、十六を巽、二十三を艮、三十を坤として象徴的に描き出すとする理解である(章偉文訳注『周易參同契』、北京：中華書局、二〇一四年、君子居其室章 第四十二、注釈三、一六八—一六九頁)。

(28) 鈴木由次郎『漢易研究』(増補改訂版)、東京：明德出版社、一九七四年、第二部 漢代象数易の研究Ⅴ第二章 象数易の展開Ⅴ第二節 卦氣、一七〇頁。辛賢『漢易術数論研究—馬王堆から『太玄』まで—』、東京：汲古書院、二〇〇二年、第二章 孟喜・京房の卦氣六十四卦構造Ⅴ第三節 卦氣六十四卦の十二進法的構造、一〇二頁。辛氏はまた、四時・十二月・二十四節氣(七十二候)を総じて「暦候」と称する(同書、一〇三頁)。藤田衛『易緯稽覽図』に見えたる卦氣説—京氏易との関連をめぐって—、『東洋古典学研究』四四、二〇一七年、一頁。

(29) 濱久雄『東洋易学思想論攷』、東京：明德出版社、二〇一六年、第一章 中国古代における易と暦法の牽連関係—卦氣説の構造と原理を中心として—、一三頁。

(30) 朱伯崑『易学哲学史』(一)、北京：昆仑出版社、二〇〇九年、第二編 漢唐時期Ⅴ第三章 漢代的象数之学Ⅴ第一節 孟喜和京房的卦氣説、一三〇頁。呂紹綱主編『周易辞典』、長春：吉林大学出版社、一九九二年、三六九頁。

(31) 張善文『周易辞典』、上海：上海古籍出版社、一九九二年、四〇〇頁。

(32) 按『易緯稽覽圖』鄭注的解釈、其所謂「卦」是指六十四卦、「氣」是与卦對應的季節氣候（王葆玟「西漢『易』學卦氣說源流考」、林慶彰編『中國經學史論文選集』(上)、台北：文史哲出版社、一九九二年、一七三頁。初出は、『中國哲學史研究』一九八九—四、一九八九年）。

(33) 続いて第二段階は、孟喜によつて体系化された卦氣説であり、四正卦の二十四爻を二十四氣に、十二月卦を十二月に、さらに十二月卦の七十二爻を七十二候にそれぞれ対応させる理論である。第三段階は、京房の師である焦延寿に遡る分卦直日の法である。第四段階は、京房自身によつて構築される六日七分の法である。さらに第五段階として、この六日七分の法が、京房の弟子である段嘉らによつて改変・整備されていく過程が挙げられる（王葆玟「西漢『易』學卦氣說源流考」、林慶彰編『中國經學史論文選集』(上)、台北：文史哲出版社、一九九二年、一八四—一八五頁）。

(34) 二爻(參)子、①夫損益之道、不可不審察也。②吉凶之□也。③益之爲卦也、春以授夏之時也、萬勿(物)之所出也、長日之所至也、產(?)之室也、故曰益。④損者、秋以授冬之時也、萬勿(物)之所老衰也、長「夕之」所至也、故曰產(損)。道窮□□□□□□□□。⑤「益之」始也吉、元(其)冬(終)也凶。⑥損之始凶、元(其)冬(終)也吉。⑦損益之道、足以觀天地之變、而君者之事已(已)（陳鼓應主編『道家文化研究』三、上海：上海古籍出版社、一九九三年、帛書「二三子問」「易之義」「要」釈文（陳松長・廖名春）、四三三五頁）。釈文は原則、邢文氏が参照した『道家文化研究』三による。ただし、本字のみが示され、省字・異体字が示されなかった場合は、「省字（本字）」の形式に統一するため

限り、廖名春『帛書周易論集』、上海：上海古籍出版社、二〇〇八年、六。帛書『周易』経伝釈文∨帛書『要』釈文、三八九頁を参照。句読は適宜改めた。

(35)〔後晋〕劉昫等撰『旧唐書』(四)、北京：中華書局、一九七五年、卷三四 志第十四 曆三、一二三五頁。

(36)〔後晋〕劉昫等撰『旧唐書』(四)、北京：中華書局、一九七五年、卷三四 志第十四 曆三、一二三六頁。

(37) 邢文『帛書周易研究』、北京：人民出版社、一九九七年、下篇 伝文∨帛書『周易』与古代學術∨第八章 帛書『周易』 伝文所見卦氣説∨第二節 帛書『周易』 伝文所見卦氣説、一五一—一五二頁。

(38) 六十四卦与四時節氣的变化相對應的學説、就是卦氣説(邢文『帛書周易研究』、北京：人民出版社、一九九七年、下篇 伝文∨帛書『周易』与古代學術∨第八章 帛書『周易』 伝文所見卦氣説∨第一節 卦氣説的定義、一四八頁)。

(39) 邢文『帛書周易研究』、北京：人民出版社、一九九七年、下篇 伝文∨帛書『周易』与古代學術∨第八章 帛書『周易』 伝文所見卦氣説∨第三節 時∨重新認識卦氣説、一五四—一五九頁。

(40) 古者包犧氏之王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地、觀鳥獸之文、與地之宜、近取諸身、遠取諸物、於是始作八卦、以通神明之德、以類萬物之情(〔魏〕王弼注、〔唐〕孔穎達疏『周易正義』、北京：北京大学出版社、二〇〇〇年、卷第八 周易繫辭下第八、三五〇—三五二頁)。八卦成列、象在其

中矣（同書同卷、三四六頁）。

(41) 在天成象、在地成形、變化見矣（〔魏〕王弼注、〔唐〕孔穎達疏『周易正義』、北京・北京大學出版社、二〇〇〇年、卷第七 周易繫辭上第七、三〇三頁）。

(42) 廣大配天地、變通配四時（〔魏〕王弼注、〔唐〕孔穎達疏『周易正義』、北京・北京大學出版社、二〇〇〇年、卷第七 周易繫辭上第七、三二一頁）。法象莫大乎天地、變通莫大乎四時（同書同卷、三四〇頁）。

(43) 邢文『帛書周易研究』、北京・人民出版社、一九九七年、下篇 伝文・帛書『周易』与古代學術Ⅴ第八章 帛書『周易』 伝文所見卦氣説Ⅴ第三節 時・重新認識卦氣説Ⅴ（六） 帛書『周易』 伝文所見卦氣説的意義、一七六一—一八三頁。

(44) 初為陽、二為陰。三為陽、四為陰。五為陽、六為陰。一三五七九、陽之數。二四六八十、陰之數。陰主賤、陽主貴。陰從午、陽從子。子午分行、子左行、午右行。左右凶吉、吉凶之道（『京氏易伝』、四庫全書本、卷下、二葉）。「陰」ではなく、「陰」と記すのは四庫全書本に従う。

(45) 立春正月節在寅、坎卦初六、立秋同用。雨水正月中在丑、巽卦初六、處暑同用。驚蟄二月節在子、震卦初九、白露同用。春分二月中在亥、兌卦九四、春秋分同用。清明三月節在戌、艮卦六四、寒露同用。穀雨三月中在酉、離卦九四、霜降同用。立夏四月節在申、坎卦六四、立冬同用。小滿四月中在未、巽卦六四、小雪同用。芒種五月節在午、乾宮九四、大雪同用。夏至五月中在巳、兌宮初九、冬至同用。

小暑六月節在辰、艮宮初六、小寒同用。大暑六月中在卯、離宮初九、大寒同用（『京氏易伝』、四庫全書本、卷下、二―三葉）。そのうち、「乾宮」は朱伯崑『易学哲学史』（上）に従って、「震宮」の誤りとされる（邢文『帛書周易研究』、北京：人民出版社、一九九七年、下篇 伝文：帛書『周易』与古代学術Ⅴ第八章 帛書『周易』伝文所見卦氣説Ⅴ第三節 時：重新認識卦氣説Ⅴ（六） 帛書『周易』伝文所見卦氣説的意義Ⅴ脚注一―二八、一八一頁）。

(46) 分六十四卦、配三百八十四爻、成萬一千五百二十策、定氣候二十四（『京氏易伝』、四庫全書本、卷下、四葉）。

(47) 講卦氣不能不講陰陽之氣（邢文『帛書周易研究』、北京：人民出版社、一九九七年、下篇 伝文：帛書『周易』与古代学術Ⅴ第八章 帛書『周易』伝文所見卦氣説Ⅴ第三節 時：重新認識卦氣説、一八二―一八三頁）。

(48) 陰陽之氣的消息盛衰、是在卦氣之氣的運行中展開的。也就是說、是在四時・節氣、在時間的維度中展開的（邢文『帛書周易研究』、北京：人民出版社、一九九七年、下篇 伝文：帛書『周易』与古代学術Ⅴ第八章 帛書『周易』伝文所見卦氣説Ⅴ第三節 時：重新認識卦氣説、一八三頁）。

(49) 卦氣之氣既包括有明晰時間界定的四時・十二月・二十四節氣・七十二物候乃至三百六十日（六日七分説）、也包括在此背後無形消息、流動不居的陰陽二氣（劉春雷「卦―氣」含義与卦氣思想發源考）、『国学論衡』十、二〇二一年、一「卦―氣」含義与卦氣説的「起源」問題、二九頁。上記の論文は、

劉春雷氏の博士学位論文「西漢易学卦氣說研究——以孟喜、焦贛、京房和『易緯』為中心——」（山東大
学博士学位論文、二〇一六年提出）の第一章をもとに、若干添削が加えられたものと見られる。

(50) 首先是陰陽五行的氣機變化、其次才是時令年月節氣物候之表徵（劉春雷「卦—氣」含義与卦氣思想發源考」、『国学論衡』十、二〇二一年、結論、四一頁）。

(51) 小沢文四郎「卦氣說について」、『漢文学会々報』三、一九三五年、四 結語、五二頁。

(52) 王者躬行道德、承順天地、……事節財足、黎庶和睦、則卦氣理效、五徵時序、百姓壽考、庶山蕃滋、符瑞並降、以昭保右（〔後漢〕班固撰『漢書』、北京：中華書局、一九六二年、卷八十五 谷永杜鄴伝、三四六七頁）。

(53) 奏文と近似する表現は、『尚書』洪範に、「八。庶徵。曰雨、曰暘、曰燠、曰燠、曰寒、曰風。曰時五者來備、各以其敘、庶草蕃廡」とある（〔前漢〕孔安国撰、〔唐〕孔穎達疏『尚書正義』、北京：北京大學出版社、二〇〇〇年、卷第十二 洪範第六、三七七頁）。

(54) 乾西北也、主立冬。人定白炁出、直乾。……坎北方也、主冬至。夜半黑炁出、直坎。……艮東北也、主立春。雞鳴黄炁出、直艮。……震東方也、主春分。日出青炁出、直震。……巽東南也、主立夏。食時青炁出、直巽。……離南方也、主夏至。日中赤炁出、直離。……坤西南也、主立秋。晡時黄炁出、直坤。……兌西方也、主秋分。日〔入〕白炁出直兌（〔清〕趙在翰輯、鐘肇鵬・蕭文郁点校『七緯附論語識緯』（上）、北京：中華書局、二〇一二年、易緯通卦驗 卷下、一三九—一四二頁）。句読は適宜

改めた。

(55) 劉大鈞「卦氣」遡源、『中国社会科学』二〇〇〇—五、二〇〇〇年、一二二—一二九頁。

(56) 以孟喜為發端的西漢易学卦氣説、自登上歴史舞台便体系成熟、此前思想發展脈絡大多隱匿於歴史地表之下（劉春雷「卦氣」含義与卦氣思想發源考、『国学論衡』十、二〇二一年、緒言、二七—二八頁）。

(57) 劉春雷「卦氣」含義与卦氣思想發源考、『国学論衡』十、二〇二一年、三四—三五頁的正卦的雛形…「天氣」四方風与「地氣」四方土、三四—三八頁。

(58) これに先立ち、劉春雷氏は、八経卦の一つである乾卦(☰)と甲骨文に見られる「氣」とが形態的に共通性を有することを論証し、乾卦そのものにして「氣」の思想が内包される可能性を指摘している（劉春雷「卦氣」含義与卦氣思想發源考、『国学論衡』十、二〇二一年、二「氣」的語源学考遡及其与「乾」(☰)的關係、三一—三四頁）。これに対して、廖名春氏は、坤卦の卦名である「坤」という文字の成立自体に、すでに八卦卦氣説が内在することを論証しようと試みる。すなわち、許慎『説文解字』が「土位在申」を用いて「坤」を解釈している点を踏まえつつ、段玉裁および惠棟が『周易』説卦伝や『易緯乾鑿度』を援用してこれを敷衍してきた学説を整理したうえで、廖氏は、「坤」字の創出が、八卦・八方・十二支の配合關係を前提とすると論じる（廖名春『周易』経伝与易学史新論、済南：齐鲁書社、二〇〇一年、第二章 坤卦卦名探源兼論八卦卦氣説産生的時代、三五

頁)。

(59) 寒往則暑來、暑往則寒來、寒暑相推而歲成焉(〔魏〕王弼注、〔唐〕孔穎達疏『周易正義』、北京・北京大學出版社、二〇〇〇年、卷第八 周易繫辭下第八、三五〇—三五二頁)。

(60) 夫陰陽四時、八位、十二度、二十四節、各有教令(〔前漢〕司馬遷撰『史記』、北京・中華書局、一九六二年、卷百三十 太史公自序、三二九〇頁)。陰陽家者流、蓋出於羲和之官、敬順昊天、歷象日月星辰、敬授民時(〔後漢〕班固撰『漢書』、北京・中華書局、一九六三年、卷三十 藝文志、一七三四頁)。古代の曆家に由来する陰陽家が、陰陽と曆日とを密接に結びつけて捉えていたことは、上掲の引用文によって示されている。

(61) 筆者はかつて、『漢書』魏相伝における「易陰陽」と「明堂月令」の関係を検討する際に、「易―陰陽―四時―明堂月令」という配当関係を析出し、また、魏相との関連が指摘される元康五年詔書冊から「易―陰陽―夏至―月令」というほぼ同型の配当関係が確認されることを指摘した(拙稿「魏相とその災異思想」、『東洋の思想と宗教』四二、二〇二五年、八一―九九頁)。易と月令の間に見られる易・陰陽・時(曆日)の相關関係は、卦氣説においても同様に適用し得ると考えられる。

(62) 清の唐晏は、「漢人卦氣・消息・納甲・爻辰之説、固本之五行陰陽」と述べ、五行・陰陽を卦氣・納甲・爻辰などの漢易理論の基盤と位置づけている。ただし、唐晏は、五行が八卦に由来すると考えており、五行と八卦との関係を強調しすぎているくらいが否定できない(〔清〕唐晏著、吳東民点校

論叢アジアの文化と思想 第34号

『両漢三国学案』、北京・中華書局、一九八六年、卷一周易、一頁。